

児童健全育成賞（數納賞）奨励賞

ごちゃまぜの児童館 —地域の居場所・未来へつながる活動—

長野県松本市

寿台児童館 児童厚生員 竹内 亜哉

はじめに

子どもの幼い頃の体験をどう考えて行くか

私は、子どもの未来にはたくさんの選択肢があるって、自分で自由に選べると思っている。しかし、実際は経験不足、過干渉、人の関わりの不足、貧困等で子どものころから、「無理、どうせ、やってもつまらない」等、現場にいると良く聞こえてくる。このような状態の子どもたちに自分の可能性を信じ、楽しんで達成感につなげ、生きていく力を持つためにどう一緒に考えていけばよいか、そして、保護者、地域へ発信の仕方を考えた。

1. 最初から無理

児童館に勤務するようになり9年。共通に聞こえてくる言葉が「無理」。様々な遊びのプログラムを実行しようと試みても、やったことがないのが「怖い、実は不安、失敗するのが嫌。」このような気持ちがストップをかける。いきなり大きなことをして、結果をすぐに求めようとするからこの気持ちが消えないのであって、子どもの持つ力は無限だと私は思うので、じわじわと自信がつけられる様なスマールステップをいくつか用意する事にした。

まず初めに、子どもの声を拾う。児童館で過ごす子どもたちに普段の何気ない会話の中からやりたいことを探る。児童館での小さなお手伝

いを通し、実はやってみたかったことのヒントを得る。その中で始まったのが1.裁縫、2.学習支援、3.食事、4.子ども企画行事、5.ボランティアの活用であった。

2. 家庭では出来ない現状

4年前から勤務する児童館は、学校から直接来館する登録児童が約20名、家庭から自由に来館する一般来館児童が1日平均5~10名。高齢化が進む団地の中にある小さな児童館である。利用人数は多くはないが、それぞれに抱える問題は大きい。ただ、児童館に来館して過ごす間は、どの子もやわらかい気持ちでいて欲しいので私は傾聴を心掛けた。子どもの話しやすいような雰囲気の中、冗談をまぜながら子どもの声を拾った。

- ・一般来館3年男子「勉強していても家だと誰も教えてくれない。」
- ・登録児童2年女子「お母さんが針仕事をしているのは見ているだけ。やってみたいけれど、難しそう。」
- ・学校休業日に来る一般来館の多子世帯兄弟「今日、なんも食ってねえ。」
- ・一般来館5年男子「あ～つまんねえ。何か楽しいことないかな。」
- ・一般来館高校生女子「久しぶりに先生の顔見に来たよ～。学校面倒くさい…ちょっと聞いて！」

子どもたちは、何かやってみたいけれど、そこをあと一押しするものがなければ、自分たちで出来るチャンスを逃していた。家庭ではフルタイムで働く親は夕方子どもと一緒に家事をすることは難しい。食べさせて、風呂に入れて、寝るように声をかけることの繰り返し。勉強は学校でやって欲しいので宿題も家庭で確認までは至らず時間的な余裕はない。褒められる経験も不足し、いまいち自信が持てない様子であった。

3. 失敗しても出来た！＝嬉しい →裁縫で達成感を高める

なぜ児童館で取り組むのか？子どもたちには放課後の時間がある。普段は児童館にふらっと立ち寄って自分の好きな遊びをして帰る。児童館利用の仕方は様々ある。その遊びの中に、「家庭に帰ってから自分で出来る家庭のこと」を体験したら家庭でも実践出来るのではないかと考えた。私は幼い時、祖母が身近にいたため料理、裁縫を教わる機会があった。現在、家庭科として授業を受けるのは小学5年生。それまで家庭での経験がない子どもは5年生で初めて針を使ったりアイロンに触れる。針も、アイロンも危ないアイテムのため、児童館ではほとんど見かけない。鉛筆をカッターで削ることすらしたことがない。おままごと遊びで包丁を武器に見立てて友達の腹に刺して笑う子ども達。本当に刺さったら痛いこと、ふざけて人に本物の刃物を向けたら怪我をしてしまう原因になる事も針はチクッと刺さると痛い、アイロンも不用意に触れると熱い等この活動を通して学んだ。

3年前から取り組む「～ぬいぬい」は手縫いで日常使う小物を作る。対象は全学年。始めは、糸を通すだけでかなり時間を要していたが、職員は小さなヒントを口頭で言うが手は出さない。糸が何分かかっても通るまで「斜めに切ってがらん」等、声掛けを行ない見守る。子どもたちはがんばって糸が通った時の喜びはとても大きかった。普段飽きるのが早い子も糸通しだけは集中した。要領を得ると早く通せるようになり、

1年生もあっという間に糸通しが出来た。糸通しから始める小さな目的のもと、3年間、冬の工作として定着してきて子どもからの企画も上がり始め、落ち着いて取り組む姿が見られた。保護者も家庭ではまだ早いと思っていて裁縫はやらせたことがなかったことや、忙しくて教えている暇やきっかけがないことを児童館で実際に取り組む我が子をお迎え時に見ながら話してくれた。今度は家庭で簡単な物を一緒に作れたらと話す保護者も出てきたことは嬉しかった。

（2年生男子 ボタンがつけてみたい）

靴下ぬいぬいを行ったとき、当初飾りはスパンコールや型抜きフェルトを手芸用ボンドで留める予定で準備していた。ほとんどの子どもがボンドで留める中、2年生の男子がボタン型のフェルトを見て、「俺、ボタン付けやってみたい！」まっすぐ縫うことは慣れてきたので新しいことをさがした様子。一緒にボタンの付け方をやると、良く見ていてボタンを自分で付けた時、満足そうに保護者に作品を見せていました。自分から挑戦したいことが見つけられて嬉しかった。

今年は3年目、子どもからの企画のもと、ハンカチ縫いと棒針編みが始まった。ハンカチは簡単だからこそ、縫い目が目立つので細かく縫えるように挑戦している。棒針編みは「棒針は使ったことがないけれど、僕、やってみたいの。」冬の落ち着いた時期、ゆったりとした時間の中で挑戦したい気持ちを大事に目標の1メートルマフラーを目指して取り組んでいきたい。

4. 学習支援と食=ブームに乗った わけではなく必要だった取組み

寿台児童館では、4年前から学習支援のみの取り組みを行っている。長野県元気作り支援金の補助を受け毎月約2回、地域の有償ボランティア講師が児童、中学生の分からないところに寄り添って学ぶ喜び、自ら学ぶきっかけを伝えることが目的である。ひとり親、共働き世帯が多い地域のため親子でゆっくりと家庭学習を行う時間が取れない。はじめて3年間は学習のみの

取り組みだったが、元気作り支援金は3年で補助が終了するため、今年度から日本社会連帯機構と松本市子どもの居場所づくり交付金を活用し、実施も月3～4回になった。

軽食「おむすび、みそ汁、おかず（2品ほど）」がつくようになり、学ぶことはもちろん大切だけれど、食事の時間に講師や時々お迎えに来た保護者も交えての食事と会話が楽しく、地域の調理ボランティアのおばあちゃんが作ってくれる食事は毎回ほとんど残らない。児童館と子どもと地域が三角に繋がるイメージでお結びに例えて、名称は「さんかくおむすびくらぶ」。小学校、中学校に申込み書の配布をお願いした。必要と感じる子どもには積極的に声をかけている。しかし、なかなか来館に結びつかない。児童館で勉強することに抵抗がある様子。仲のいい友達と宿題を持ってきて開く作業から、おむすびくらぶの参加の打診が必要になる。短いスパンでは出来ない活動なので諦めず声をかけていきたい。又、講師料や食の提供については補助金等を利用しているが、いつまでも頼っていては出来ないので、自立して出来るよう現在模索している。

（児童館の学習支援は塾や学校とは違う）

学習支援というと、成績を上げないといけないという観念にとらわれてしまいがちだが、実際はもっとシンプルで、一問でもわかったという感覚や頑張った過程を褒めてもらうことを大切に行なう。寿台児童館では、宿題をみてくれるボランティアのおばさんが毎日児童下校の時間に合わせて来館する。職員ではないので子どもたちとゆっくり寄り添って関わってくれる。時には辛辣な言葉を子どもに掛けられることもあるが1年半以上児童館に関わってくれる存在は大きい。「私、教え込むことは出来ないけれど、見守る事なら出来るので児童館に伺ってもいいかしら？」児童館便りにボランティア募集を出して初めて声をかけて頂いた方だ。おむすびくらぶにも一緒に講師補助として関わり本当に助かっている。地域の方が子ども達と日常から関わってくれるきっかけにもなった。

（中学1年女子　ふらっと話も出来る居場所）

児童館に来て勉強なんて嫌と思っていた子も学年が上がり将来について考える事が出て来た。彼女には話を聞いてくれる人がいる場所の必要性が出てきて、やっとおむすびくらぶに来られるようになった。中学生になり、参加した帰りには玄関先で悩みや愚痴を世間話を交えて職員に話して帰る。「テストの点数が、ガクッって落ちてるの。8教科やって200点台…私、バカだからさ～ダメなんだよ。英語ひとヶタだった。ヒアリングの問題は良かったんだけどね。」喜怒哀楽が激しいので落ち着いているときに話を聞きながら、この子にとって児童館が実施日以外にも気軽にふらっと立ち寄れる居場所になっていけばと感じた。彼女は言葉がけひとつでイライラのスイッチが入る。職員でも自分より小さな子どもにもお構いなしに暴言を吐く。そんなイライラがここで気持ちを伝えられることで落ち着いていけるよう、児童厚生員が話やすい雰囲気を作っていく努力をしなくてはいけない。常に私たちも様々な子どもと向き合う事から学ぶ姿勢を忘れてはいけないと感じた。

5. 体験を通して食について考える

大人になって生きていく上で大切な食を通した取り組みは2つある。いずれも2年目の寿台ハッピー食堂（地域全体の住民が参加できる子ども食堂）、ハッピー弁当（基礎的な調理体験から今年は寿台ハッピーワールド内で本場の人から自国の料理を学ぶ）

（寿台児童館　3つの食に関する活動）

1. みんなで作ってみんなで食べること。
2. 低学年から子どもに刃物や火を扱う体験をすること。
3. フードドライブ活動（家庭に眠る賞味期限が1～2ヶ月以上あって食べる予定のないものを集めて生活困窮者や子ども食堂に提供している）

食べられて当たり前と言う感覚から食べることは大切な事、食品ロスをなくすと言う意識に繋がり、多くのことを深く学んだ。

ハッピー食堂は、連合町会や民生委員、地域のボランティア部会に協力をお願いし、長期休みや学校休業日に不定期開催している。児童館の外へ飛び出して地域の集会所を使うことで地域のお年寄りも気軽に参加する。開催に至るまでは職員の中でも多くの議論を重ね、準備期間は約3ヶ月かかった。ボランティア、食材、資金、場所、アレルギー対策、広報はどうするのか？一番は、職員の共通認識。「何のためにやるのか？なぜ、児童館発の子どもも食堂なのか、やっていけるのか。」勢いだけでやろうとするならば継続は難しいのでやめた方が良いこと、普段は2人館という職員体制で準備はどうしたらよいのか？貧困対策だけではなく、孤食の子どもにスポットを当てることで広く子どもたちや地域の人が参加できる。職員が共通認識を持つてできるまでに話し合いを繰り返し同じ方向を向いていった。

28年2月臨時運営委員会を開き、子ども食堂について説明し地域の方の意見を聞く機会を設けた。連合町会長さんの「子どもは宝。なんだか良く分からねえけどとりあえずやってみるじゃん。」このひと声で開催に繋がった。地域のありがたさを心から感じた。

現在野菜の提供は松本市の公設市場から規格外になった食材を無償で提供していただいている。児童館の中の地域と繋がることがとても上手な職員の働きのもと、地域の方に広く協力を得られた。毎回子どもから大人まで60人前後参加のハッピー食堂はもうすぐ2年目を迎える。運営は大人は100円以上の寄付、フードドライブで賄っている。子どもたちは、食べにくるだけでなく、毎回簡単な調理体験や交流が出来る遊びを入れている。自然と子どもと大人が関わるよう大きな「手作りすごろく」、福祉ひろばの方から教わった「手作りカレーゲーム」、夏休みには宿題学習会、ハープの演奏会と体験等プログラムはその時に必要な事を取り入れた。

やむをえず持ち物のエプロンやバンダナが揃わない子どもには、児童館で手縫いで作ったエプロンを貸し出して手ぶらで気軽に参加でき

る食堂になった。子どもの中には、エプロンやバンダナやハンカチ等の持ち物が揃えられなくて参加を渋っている子もいる。そのような子がひとりでも減っていくように児童館利用者の子どもたちと手縫いで作成した。

(毎回参加してくれるおばあちゃんと

子どもたちの温かい話)

ハッピー食堂を開催する時は、町会に全戸配布で申込み書が回る。でも、決定時期が急に決まると配布が間に合わず、学校と児童館のみの配布になる。児童館に走ってきた3年生の兄が「先生、○○婆がハッピー食堂の申込み書あるか？今回は行っていいの？って聞かれたんだけど、申込み書ちょうどだい。」彼は、申込み書のみをとりに児童館に来た。この兄妹と○○婆ちゃんは初回のハッピー食堂で知り合った。そこから毎回ハッピー食堂に参加するときは一緒に来る。「○○婆ちゃんに先生もお手紙申込み書にかいたから、これ、持つて行って。」とお願いすると数日後○○婆ちゃんが児童館に申込み書を持って来館した。「私、涙出たわ～。あの子に申込み書のことを聞いたら、走つてわざわざ取りに行ってくれたんだよ～。そしたら、先生からも手紙かいてあるじゃん。嬉しくてね…ああ、思い出したらまた、涙出るわ。」一人暮らしの○○婆ちゃんはハッピー食堂が大好き。子どもたちに分け隔てなく声をかける。ありがたい一人。そんな方に支えられてこの活動が出来る地域に感謝。その後、この○○婆ちゃんが近所の子どもの名前を書いて申込みにきた。なかなか親の了解が得られず参加できなかった家庭



にいる子どもだったので、どうしたら参加できるか職員も悩んでいた。この申込みが、保護者に直接電話を掛けるきっかけになった。私は「近所のおばあちゃんがハッピー食堂の申込みを持ってこられたのですが、△くんのアレルギー等、始めはおうちの方に確認してからの参加になるので、教えていただけますか?」と、保護者に電話を掛けたところ、アレルギーもなく、参加も可能だった。他にも兄弟がいて、参加をしたくても保護者とコンタクトが取れなかつたのも一気に解決し、必要な子どもたちも更に利用できるようになった。

6. 将来、考えて食べることが出来るように

フードドライブを通じ食品ロスについての活動を始めた。子ども目線で食品ロスを考える創作絵本「すてないでもったいないよ」を作り、地域の保育園や児童館で多くの人が集まる行事、ハッピー食堂で朗読した。フードドライブ活動については隣接する福祉ひろばに協力を依頼し、子どもたちが作った元気になる黄色い箱の中に家庭から常温保存できる食品を募った。一人暮らしをしている高齢者中心に食材が集まっている。集まった食材は子ども食堂や学習支援+食の活動、生活困窮者支援団体へ寄付をしている。

フードドライブ活動を通して2年目、食について興味を持った子どもが児童館で年間通して調理を学ぶ「ハッピー弁当」を企画した。春には畑で夏野菜の苗を植えて調理に使う。子どもたちには手軽に出来る調理器具から、危険が伴う調理器具（フォーク→包丁→ホットプレート→カセットコンロ→フライパン）へと2ヶ月に1回の調理体験をしながら使える調理器具を段階的に増やし料理の楽しさを学んだ。

2月はお弁当を自分で詰めるシュミレーションとして紙を使ったお弁当づくり「食べられないからうそつこハッピー弁当」と本番のメニュー決め、3月のまとめには家族や地域のお世話になつた人を招いて子どもたちが考えたメニューで弁当を作り一緒に食べた。当日は地域のボラ

ンティア、高校生ボランティアと一緒に協力して作つた。子どもには2個の弁当を持ってきてもらい、ひとつは保護者用に詰めること、もうひとつは自分用に詰める。保護者は子どもたちが作ったおかずを嬉しそうに食べていた。この活動を通して、毎回、レシピカードを完成させ年間通すと自分のレシピ本として手元に残るようとした。

児童館利用者の中には外国籍の子どももいる。からかいや悪口の対象になる恐れもあった。そこで市内には様々な国の人々が生活していることも合わせて学ぶため、松本市の多文化共生プラザにボランティア要請もして中国の方と異文化交流も兼ねて行った。児童館を利用している子どもたちに、自分と関わる人を国は関係なく寛大に受け入れようとする気持ちが芽生えてきたことは大きな収穫になった。

（子どもってすごいよね～！

児童館に関わる大人の話）

松本市多文化共生プラザにも関わりを持つ市内の生活困窮者支援団体の代表の方がハッピー弁当の時にも時間を見つけて来てくれた。子どもとも顔なじみになって親しく話をするようになった。年間通しての活動だったので、初めのころの包丁使いを良く知っている。つい、大人が危ないから手を出したくなるところをグッとおさえてまずは見守ってきた。季節が過ぎ、秋に火を使い始めた頃や最後のお弁当作りでは「僕、寿台の子どもたちの包丁使いを見ていて、怖いところがなくなったよ。子どもって本当にすごいよね～。弁当まで作ってしまうんだから…。」とたくさん子どもたちを褒めてくれた。職員と一緒に、地域の大人が子どもたちを見守つていけるハッピー弁当の取り組みは、29年度、小さな児童館から世界に目を向けることとなり、本場のブラジル、中国料理を教わっている。

こうした児童館の活動を通して、職員のみではなく、地域とつながることも心掛けた。寿台児童館は各学校から離れているため、ボランティア活動を募集しても集まるか不安があった。しかし、不安や駄目だと思っては子どもたちの

「無理、やってもどうせダメ。」と重なってしまふのではないか?と思った。始めは期間の短いボランティアから地域に依頼する事にした。

近隣の高校は児童館から自転車で坂道を30分程行ったところにある。28年度、始めは夏休み限定でボランティアを依頼したところ、生徒会の生徒が参加した。3日間という短い期間だったが、何も接点のないところから交流に繋がった。半年たって1月、学校側から連絡があった。休部についていたボランティア同好会が再始動するので、活動先としてお願いしたいとのこと。継続性を持って児童館の子どもと、生徒が関わる良いチャンスととらえ受け入れた。生徒たちは元々、違う部活から、ボランティア同好会に転部したとのことで、身体を動かすことで良く子どもと関わった。約1時間半の活動を終えると、30分の反省会があり、生徒と職員で子どものとの関わりを振り返る。高校生の視点で、子どもと関わっていて危険なことなどを話す。簡単な記録の紙を用意し記入する。時には最近の高校生の生活事情等も話す中で、彼らの中にも、学校ではなく家庭ではないこの場所で子どもと関わる事によって居場所となっているような感触だった。児童館の行事も週1回くる中で参加し、秋には「秋祭り」で1つのブースを任せた。ただ、関わる以外にも児童館の企画に主体的に参加してほしいという願いがあった。いつも放課後関わる子ども以外に地域のお年寄り、つどいの広場の親子連れも入り新たなる関わりが見えた。日々の活動に関しては学校の先生の協力も不可欠で、活動日の連絡も学校から入って来ている。先生は、高校で見せている表情と違い積極的な態度と笑顔が見られて児童館活動を取り入れて良かったとおっしゃっている。今、もうひとつの高校からも月1~2回の活動で児童館ボランティアに来て頂いている。両校がつながって児童館での中高生の居場所づくりと一緒に考えられたらと常々思っている。

7. 来年の行事は自分たちで考えよう

年間計画を立てるとき、職員が来年の子ども

の姿を思い浮かべながら計画する事が多いが、ここ数年、子どもたちと一緒に考えている。

子どもたちはやりたい行事をカレンダーの裏で作った簡単な月ごとの表に書いていく。自分たちがやりたいものを自由に書いていいと言われると、積極的に記入する子は少ない。大人が設定したものに参加する方がいい様子だった。中には、ものすごく考えて、1時間保護者が迎えに来て時間切れになるケースもある。実際、考えた行事を行う時は、職員と同じスタッフとして行事計画を立てる。行事名、ねらい、スケジュール、用意するもの、感想、課題等が記載されている紙にスタッフ会議をしながら記入していく。会議に参加していると、途中で話が脱線する事も多く、回り道をたくさん経て納得して行事を行うまでに時間が多くかかった。でも、話し合ったことは無駄ではないと思っている。友だちの声を聞くことや、自分の意見と違うことを受け止めること、相手に言いたいことを伝えるスキルを学んでいるから。

(来年もやりたい秋祭り 3.4年生)

なぜ、夏祭りではなく、秋祭りなのか?現3年生の女子が昨年度行事計画で考えていたもの。「夏は行事が目白押しなので秋にお祭りをやりたい。」それが理由だった。この企画は、今年の夏、つどいの広場の夏まつりに手伝いをしたので、お返しでつどいの利用所を招待すること、地域の高齢者を招待することは決まっていた。発案は良かったが、リーダーは3年生のため、他の学年を引っ張るにはもう少し時間がかかりそうだと見守っていると、4年生が手伝いに自然と入ってきた。時には、4年生がリーダーのようになり計画を進めていく。2ヶ月の準備期間中は1週間予定表を出して、毎週お互いの作業の進捗状況を確認し合い活動をしていた。ねらいは「みんなが楽しかったと帰っていく秋祭り」つどいの広場の赤ちゃんから楽しめるものを企画する。

◎魚つり・ゴムでっぽうの射的、ひもひきくじ

(子ども店員の店)

◎マンカラコーナー(高校生)

◎ペタンク体験コーナー（福祉ひろばのおばあちゃん）

◎お買い物券がなくなったときの
じゃんけんおばさんとおじさん

◎一輪車発表（司会は子どもが担当）

◎先生担当読み聞かせ　おじいちゃんとパン
(本に出てくるパンを実際に調理。ラスクは
調理ボランティアさん作)

子どもたちのお店の他に、ボランティアで様々な方も加わった。

当日、一番準備が進まなかった魚釣りコーナーは大盛況。朝まで、スーパーボールすくいの網が作れずに困っていたが、ままごとのしゃもじ、お玉、フライがえしで難易度をつけて対応していた。つどいの広場の子どもたちは釣ってはいけずに返しを20分繰り返す姿等、のんびりとした空間になった。

スタッフの子どもたちの考えは、小さい子のためにどのような配置をするか？口に入らない景品の大きさはどんなものか？スタッフ会議も週1回約30分で進めなくてはいけない。職員は横で静かに聞いている。4年経過して、自分たちだけが楽しめればよいと思っていた行事から、誰かのために楽しんでもらう行事へ企画が変わってきたことが嬉しかった。来年度の行事を決める時も、「秋祭り」と子どもたちから意見が上がった時は心の中でほっとした。活動準備をしている時、葛藤しながら

「も～、あれも作らないと、これも作らないと、ああ！遊ぶ暇がない。」「今日は折り紙50個作るぞ～！」「手伝おうか？」

そんなつぶやきも聞こえた。なんとかできる事からコツコツと自分たちでやってきたことはこれからも大きな成果になると私は信じている。

8. おわりに 私の目標　ごちゃまぜの児童館

子どもたちの生きる力につけるためにどうしたら良いか考え現場で行ってきた活動には、児童厚生員だけでは達成できなかつたことが多々あったと思う。いつしか、私の中で、児童館は

地域の「ごちゃまぜの居場所」というキーワード浮かんだ。今の寿台児童館は、赤ちゃんから高齢者まで様々な人が来ている。放課後の時間は職員と利用する子どものみの日はほとんどない。近所の人が誰かどうか必ず立ち寄る場所になっている。

- ・児童館の庭や畑を年間通して見て、子どもに畑の作り方を教えてくれる隣の家のおばあちゃん

- ・子どもの宿題の時間のみ寄り添うボランティアのおばちゃん

- ・学習支援の講師、調理が伴う活動のボランティアのおばちゃん

- ・求職中に児童館へボランティアに入ったら仕事が決まって毎日帰りに顔を見せるおじさん

- ・高校生のボランティア

自らの意思で子どもと関わる事が好きな人が集うこの居場所をこれからも大切にしていきたい。子どもたちは様々な人が居て、活動したいときに児童館では自由に発言が出来、それを手助けしてくれる人がたくさんここにいる事も伝えたい。大きくなつてここで様々な体験をした子ども達がまた、児童館に戻つて活動していくことを楽しみにしたいと思う。